

吉本隆明

心とは何か

心的現象論入門

弓立社・1650円

読後すぐに思ったことは、この講演集発行の必然がどこにあるのかということだ。

「心」は現代社会の中でたしかに大きなテーマになりつつある。その構造の解明には心理学、遺伝子学、脳をふくめた解剖医学など様々な領域から踏み込まれようとしている。この著でも三木成夫の『胎児の世界』を取り上げながら、吉本は人間個人の精神の発達史を共同体の歴史段階と対応させ、語っている。たとえば、外界に対し《受け身》の存在である乳児期は、未開の問題として原始・古代の共同体が色濃く封印され、つぎの思春期にいたるまでの過程は、古代から現在の共同体の展開が深く刻み込まれているという具合にある。講演期間は一九七五年から九二年までの幅があり、常に共同体誕生から現代、そして近未来までの原像をとらえていた吉本からすれば、ややものたりなきを感じずにはいられない。

だが、『障害者問題と心的現象論』は興味深かった。「身体、精神とはなにか」というイメージをつくる場合、他の事物への理解の仕方とただ二つ違う点がある。それは、問いを発した自分自身が、自分の身体と精神機能を使って問いを発しているということであり、自分を使って自分に問いを発しているという点である。身体や精神と自分とがどのように関係を持ち、折り合いをつけるか。そのつけかたが、一人の人間が他の人間と関係するその仕方の中にあられるというところも領けた。他者への《異和》を生み出すものは、そもそも自らの身体や精神に対し、自己がそのような関係づけを行っているからであり、その延長線上に他者との関係も生まれるということである。ここに、吉本ならではの自己を相対化して見つめるまなざしがある。

最終章では、リビドーを中心とした「個」から社会との関係性を説いたフロイトと個々の無意識の底に集約的無意識を設定したユングとの相違と可能性を示す定番となっている。

出版の必然があるとすれば、吉本隆明への入門の書として、かろうじてそこに首肯せざるをえないのがこの一冊なのかもしれない。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)

自己を相対化する視線

「心とは何か」心的現象論入門

吉本 隆明著